

# 國學院大學學術情報リポジトリ

A sacred drama represented through several rituals at a shrine focusing on the relation between "mikari", "mita", "ohama-iri" and "awa-kokushi-sai" rituals at Sunomiya Jinja, Tateyama, Chiba Prefecture

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秋野, 淳一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00002016">https://doi.org/10.57529/00002016</a>

# 祭のドラマからみた同一神社の複数の祭祀・祭礼の意味

—千葉県館山市洲宮神社の「神狩」・「御田」・「お浜入り」・「安房国司祭」—

秋野 淳 一

## 要旨

神道は「祭の宗教」といわれて久しいが、祭をどのように捉え理解すべきかといった問題は残されている。宗教学者の柳川啓一は三つの祭の神学を提示し、菫田稔も柳川の三つの神学に呼応しながら、「ドラマとしての祭」を核として祭を捉えた。一方、島田潔と茂木栄は、それぞれ同一神社と同一地域の複数の祭の把握を祭研究の課題としている。そこで、本論では、式内社「后神天比理乃咩命神社」の論社で、神社縁起が伝わる千葉県館山市洲宮神社の複数の祭祀・祭礼を対象として、その祭のドラマを検討した。その結果、神社縁起の筋書きに沿う形で年間の祭を通じて、安房国開拓の神話の過去の再現を演じてきたことが判明した。しかも、そこには、同一地域の安房・洲宮・下立松原神社の三社が連関している。また、式内社「后神天比理乃咩命神社」は、祭のドラマから見ると、候補の洲崎神社より洲宮神社の方が「后神」「洲神」を体現し相応しい点を指摘した。

## キーワード

神話伝承、式内社、ミカリ、御田、国府祭、后神、安房国、祭のドラマ

## 一、はじめに

神道は「祭の宗教」といわれて久しい。しかし、神道という宗教の祭をどのように捉え、理解するべきかといった問題が残されている。

宗教学者の柳川啓一は、宗教現象としての祭一般の原型の探求という観点から「祭の神学と祭の科学—会津田島祇園祭<sup>②</sup>—」を著した。この中で祭研究を行う際の主観的前提として、祭の神学の認識と、祭の神学と科学との分業の必要性を説き、会津田島祇園祭を事例に、祭の神学として「つながりとしての祭」・「聖なる劇としての祭」・「矛盾の併存としての祭」の三つの神学を提示している。つまり、柳川は上記の三つの要素が祭にあることを明らかにしている。

宗教学者の菫田稔は、柳川の三つの祭の神学と呼応しながら、「祭りとは—、劇的構成のもとに祭儀と祝祭とが相乗的に現出する非日常的な集団の融即状

況の位相において、集団の依拠する世界観が実在的に表象するものである。そして、その表象された世界像のなかで、集団はその存続の根源的意味を再確認し、成員のエトスが補強される。要すれば、祭りは集団の象徴的な再生の現象である。」と定義している。ここで、「劇的構成のもとに」とあることから、祭の基底にあるのは「劇的構成」と解される。つまり、菫田は柳川が提示した「聖なる劇としての祭」を核として祭を捉えているといえる。それは、菫田が「都市祭礼としての川越氷川祭」の中で述べた、「一般に日本の祭礼は、いうまでもなく儀礼文化に属するなかで特に神聖な社会儀礼であり、一種の神話的な社会劇（ソシオ・ドラマ）である。あるいは地域社会が、その神話的始原をドラマ的に再現して一時的に理想の霊的な共同体（コミュニティ）を蘇生せしめるといったもよい。」との規定とも対応する。

そこで、本論では、「聖なる劇としての祭」（ドラマとしての祭）を一つの視点として、特に菫田の定義のように、「一種の神話的な社会劇」、「神話的

始原をドラマ的に再現」といった要素に注目しながら、個別具体的な神社祭祀・祭礼の分析を試みたいと思う。それは一見、柳川のいう「祭の神学」に捕らわれているようであるが、一度その「神学」に捕らわれてこそ見えてくる豊かな祭の世界と、逆に一つの「神学」を意識的に分析の核に据えてこそ、その「神学」だけでは説明しきれない多元的な祭の世界に出会えるのではないかと考えるからである。勿論、既に神社祭祀・祭礼のドラマを明らかにしたものに、例えば、茂木栄の研究<sup>②</sup>、島田潔の研究<sup>③</sup>があるが、こうした視点が祭研究において一般化したとは言えない<sup>④</sup>。そのため、拙稿「里芋祭の儀礼構成にみる再生のドラマー千葉県館山市茂名十二所神社の祭礼<sup>⑩</sup>」でも祭のドラマの分析を試みているが、対象が個別神社の特徴的な一つの祭であり、複数の祭の相互関係を踏まえてはいない。

島田潔は「同一の神社の複数の祭りの相互関係というものを考慮した意味の解釈、世界観の抽出ということも、実は手付かずに残されており、今後考えてよいのではないかと思えます。」<sup>①</sup>と指摘し、同様の問題意識から「中世諏訪祭祀における王と王子」<sup>⑨</sup>を著している。また、茂木栄は「同一地域に伝承される複数の祭の関係と位置づけに、よりいっそうの注意を払うべきことを、祭調査・研究に取り組み始めたばかりの筆者に、かつて柳川啓一先生はアドバイスして下さった。」<sup>⑬</sup>として、奥三河の「花祭」伝承地域における「シカウチ神事」と「花祭」田遊・田楽<sup>⑭</sup>その他の祭の関係について、古戸集落をケース・スタディとして分析を行っている。

そこで、本論では神話的過去の再現としての祭のドラマと、同一神社と同一地域の複数の祭の相互関係を主たる着眼点として、千葉県館山市洲宮に鎮座する洲宮神社の祭祀・祭礼を分析対象としたいと思う。洲宮神社を対象とするのは、式内社「后神天比理乃咩命神社」の論社<sup>⑮</sup>という古社で、安房国開拓の神話を伝える『洲宮神社縁起』<sup>⑯</sup>が残されていて、神狩神事・御田植神事・例祭（お浜入り）・「やわたんまち」（安房国司祭）への入祭といった特徴的な祭が複数存在している。また、同一地域の安房国一宮・安房神社や国府

総社・鶴谷八幡宮との関係性を有するからである。

以上のように、本論では『洲宮神社縁起』に描かれた神話伝承の筋書きを参考としながら、実際の洲宮神社の祭祀・祭礼がどのような筋書きで神話的過去の再現を行っているか。また、こうした祭のドラマを捉えることによって、どのような祭の意味が明らかになるのかを具体相の中で検討してみたい。

## 二、洲宮・洲宮神社の概観<sup>⑰</sup>

館山市は千葉県南西部に位置し、洲宮は館山市南部、安房国一宮・安房神社と同じ神戸地区にある。洲宮のほぼ中央を洲宮川が北東から南西に流れ、北側が低山性の丘陵、南西方向にかけて緩やかに平地が展開し、その先は平砂浦で太平洋に面する。水田や畑が多く農業中心の地域で、かつては米作のほか落花生・スイカ・メロン・ピース・レタスなどの栽培が盛んであったが、現在はポピーなどの花卉栽培が中心となっている。平成二年四月一日現在の洲宮の登録人口は、人口三二二人、世帯数一七五戸であるが、洲宮神社の祭祀・祭礼に参与するのは、旧戸約三〇戸を中心とした人たちである。

洲宮の氏神・洲宮神社は洲宮川のほとりの低い山の懐にあって、入口に神明鳥居が立つ。参道には氏子の手によって植樹された桜があり、二〇段程の石段を登ると奥に神明造の社殿がある。社殿の前には樹齢八百年といわれる御神木の銀杏の大き木が聳えている。洲宮神社の氏子数は四五戸で、祭神に天比理乃咩命・天富命・天鈿女命を祀る。祭神の天比理乃咩命は天太玉命の後神で、安房開拓神話に関係が深い。神武天皇元年に天富命が阿波忌部を率いて勅命を奉じてこの地上陸し、魚尾山に奉祀したのを創建とする。当時、魚尾山は海辺にあったので洲神または洲宮と称した。文永一〇年（一二七三）に火災に遭い、天富命一八代の後裔である諸幾が現在の地に奉遷した。その後、社領は戦国時代に里見氏から三石、江戸時代に幕府から七石が寄進されている。農業の神として崇敬が篤く、明治六年（一八七三）に県社に列した。



写真1 洲宮神社の社（平成22年撮影）  
写真2 洲宮神社の社殿（平成22年撮影）

### 三、神狩神事

柳田國男は『日本の祭』の中で、「千葉県の南部、上総の南の二郡から房州にかけて、旧十一月の下旬から長い処では十日または一週間、神職の家はもちろんだが、土地の普通の住民も固い家だけは、今でも同じような物忌をする。（中略）一般にミカリまたはミカワリと呼んでいる。神様がこの間に山に入って狩をなさるので、お邪魔をしてはならぬからなどともいうが、それはおそらく名前から考え出した後の説で、本来は「見変り」すなわち常の俗界の肉身を改めて、清い祭の人になる準備期間の意であろう。」<sup>20</sup>と述べている。このミカリが洲宮神社にも伝承されている。

#### (一) ミカリの研究史

大島健彦は「ミカリ追記」で、下立松原神社（白浜町滝口）のミカリを概観した後、洲宮神社のミカリについて触れている。旧暦十一月二十六日夜から九日間行い、十一月二十七日を「イチノヒ」と呼んで、元旦よりも厳しい物忌

があり、特にイチノヒには「針仕事をしない」ことを報告している<sup>21</sup>。また、青田美砂は「房総の物忌み習俗」の中で、洲宮神社のミカリについて、「現在オミカリは十一月二十七日のみの行事となっている。ブラクの人の間では、オミカリの意識は大分薄れているが、「イチノヒに針仕事をしない」ことは現在もいわれている。」<sup>22</sup>として禁忌の持続についても言及している。大島・青田の研究から、「イチノヒに針仕事をしない」という禁忌が共通してみえる。しかし、両者とも洲宮神社で行われる神狩神事の詳細を明らかにしていない。一方、杉江敬は「洲宮神社のオミカリ祭」で神狩神事の詳細を初めて明らかにした上で、青田の指摘と同様に「イチノヒ」の禁忌が現在でも守られていることを指摘している。<sup>23</sup>

このように、先行研究では神社での神狩神事の概要、ミカリの禁忌についてはこれまで明らかにされてきたが、洲宮の神狩神事を神社祭祀として、神社縁起と神狩神事との関係、安房神社・下立松原神社における神狩神事との連関といった観点からの分析はなされていない。そこで、本章では現在の祭構成を踏まえた上でこれらの視点から論じたい。

#### (二) 現在の神狩神事

現在、イチノヒ<sup>24</sup>に当る十一月二十七日に行っている。ここでは、平成二十一年十一月二十七日の調査を基に記したい。<sup>25</sup>午前中、洲宮の旧戸・約三〇戸が各々神社に参拝する。その際、昔は米を現在は「初穂料」を納める。そして一五時から社殿と境内地で神職による厳肅な祭儀が行われる。社殿での祭典は三台の神饌（水・塩、米、御神酒）を供えて行う。祝詞奏上では、祝詞の前段部分で「この地域を開拓するに当って、山の獣・野の獣が悪さをするので、天富命が退治してくださいと遺徳を偲ぶ」といった内容が読まれ、後段は、この国の発展と平和を祈念する内容の祝詞が読まれた。玉串奉奠は氏子総代が一人ずつ行う。約一五分程度の祭事が終わると、境内地の西側（境内社・子安神社の前辺り）に、西に向かって立てられた御幣（竹の棒に幣束を取り

付けたもの)の前で神事を行う。氏子総代三名は神饌(米、御神酒、塩)を御幣前まで運ぶ。そして、祭主は御幣の左右に神饌を撒いていく。米(左三回→右三回→左三回の計九回)、御神酒(左三回→右三回→左三回の計九回)、塩(左三回→右三回→左三回の計九回)の順に行われる。最後に祭主と氏子総代が一拝して神事は終了する。この御幣の神事は時間にして五分程度である。神事を見る人は誰も居らず、閑散としている。直会を行わず、これで神事は終了する。昔は家に戻って新米のご飯を食べたという。ここで注目されるのは、御幣を西に向って立てることである。しかし、その謂れは不明で、昔から「西に向って立てる」ということだけ伝承されている。

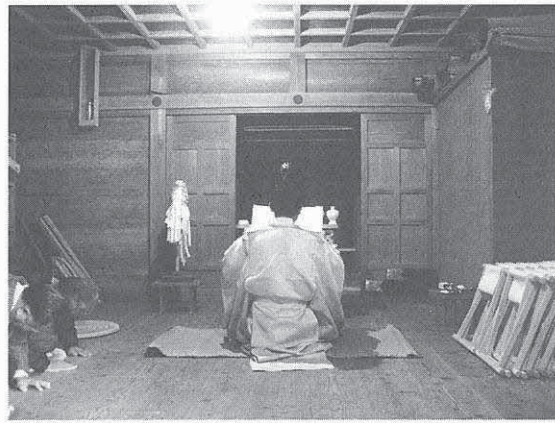


写真3 神狩神事 社殿での祭典 (平成21年撮影)  
写真4 神狩神事 境内での神事 (平成21年撮影)

### (三) 洲宮神社縁起に描かれる神狩神事

現存する『洲宮神社縁起』(一卷)は、海老名雄二によれば、「洲宮神社の縁起として伝えられたものであるが、天富命と由布津主命にひきいられた忌部の一族が安房を開拓して安房神社、洲宮神社、下立松原神社を創設した由来など古い伝承をまとめたもので洲宮一社の縁起ではない。全文の約三分の

一は失われたものとされている『安房古風土記』の逸文と推定できる。「安房忌部古記」とでも名付けた方がよいであろう。」と指摘している。しかし、見方を変えれば『洲宮神社縁起』が示すように、洲宮神社は、安房神社・下立松原神社と密接に関わっているといえる。そして、『洲宮神社縁起』の冒頭には神狩神事に関する記述がある。ここでは、縁起の筋書きを理解するという観点から、海老名雄二がまとめた読み下し文を以下に引用してみたい。

「畝火の檀原の宮にあめのしたしらしめし初国の天皇の大御代、上祖アミノフトダマノ命の孫アミノトミノ命さらに美土(うましくに)をもとめてアミノヒワシノ命の孫ユフツヌシノ命におほせて麻穀の種を播かしむ。阿波国忌部もろもろにわかちて東土(あづまのくに)に率て往きて先づ国巡いまししとき荒振る悪しき猪鹿さはにあり。そのいただける角、枯木なして山野に充ち満ちて見ゆ。人身をやぶり耕作を傷ふ。かれアミノトミノ命、ユフツヌシノ命と従へるもろもろの神を狩人となし、天のはじ弓、天のはば弓をもちて朝獵に夕獵に國中ことごとく狩立つれば、その幸つもりておのずから山となる。かれ鹿倉山と名づく。遂にもろもろの妖(あやし)きを馳け除きたひらげて無し。また風と塵のみ。これによりユフツヌシノ命をアハワケヒコノ命といふ。然る後、毎年遊獵して蒼生(あをひとくさ)の利を祈るはこの威風なり。」とある。

天富命と由布津主命が阿波国の忌部一族を率いて東国に來た際、猪や鹿が悪さをして人身を危険に曝し、耕作の妨害をしたので、弓を持って神々が狩りを行い安房国開拓の基礎を作ったという筋である。

実際に、洲宮神社の神狩神事の祝詞の中で「天富命が退治してくださいましたご遺徳を偲ぶ」という内容が奏上される。また、洲宮には、「イチノビの禁忌」として「神さまが狩りをする日だから物音を立ててはいけない」という伝承がある。つまり、安房国開拓の神話的過去の再現として神狩神事があるといえる。そう考えると、西に向って御幣を立てるのは、故郷である四国の阿波国へ向って立て、安房国開拓の始原を偲ぶのかもしれない。

#### (四) 安房神社・下立松原神社の神狩との連関

『安房座社傳記』には、「十一月廿五日 瀧口御弓渡ノ神事（神事）、同月廿六日 的場渡ノ神事（神事）、自（自）同月廿六日（自）至（至）十二月五日 神獵ノ神事 諸社ノ神人相共（相共）行（行）之（之）、（相共）今一社ノ者等執（執）行（行）之（之）」と神狩神事の記述がある。小林裕美は「下立松原神社のミカリ祭り」の中で、『安房志』に記載された同じ記述を取り上げ、「ミカリ行事に先立って安房神社から下立松原神社へ、弓と的場を渡す神事があったようです。」と指摘している。ここで興味深いのは、一月二五日に「瀧口御弓渡神事」、翌二六日に「的場渡神事」を行った後、下立松原神社では翌二七日のイチノオンビに鹿倉山へ奉幣を行うことである。大島建彦は「文化十二年の「由緒書」によると、下立松原神社のミカリでも、神主が鹿倉山に登るのに、もともと弓矢を持って行って、わざわざ狩のまねをしていたことがうかがわれる。」としている。これは、「天のはじ弓」「天のはば弓」で狩を行い、その幸が積って「鹿倉山」になったという神話に符合する。つまり、安房神社から下立松原神社へ弓と的場を渡し、「鹿倉山」で弓矢を持って狩猟の真似や奉幣の神事を行うことは、神狩神事を通じて安房国開拓の始原をドラマ的に再現するといえる。しかも、鹿倉山には「南三社」と呼ばれる安房・洲宮・下立松原神社の石祠が祀られていて、三つの祠に奉幣を行うことから、三社創建の原点が「鹿倉山」にあるといえる。「諸社ノ神人相共行レ之」とあることから、安房・洲宮・下立松原神社の三社が神狩神事を一緒にを行い、鹿倉山を媒介に三社が連関して安房国開拓の始原を再現していたことが暗示される。

#### (五) 神狩神事の意味

このように神狩神事を神話的過去の再現のドラマとして捉えると、神狩神事の別な要素が浮き彫りにできたといえる。つまり、神狩神事は、嚴重な物忌による「籠り」を基層に、安房・洲宮・下立松原神社においては安房国開

拓の神話劇を演じながら、「見変り」がなされたといえる。藪田稔の捉え方を採用すれば、神狩神事は「季節祭」であるとともに、安房国開拓を偲ぶ「記念祭」であるといえる。そして、その先には作物の豊穰が予祝されているのではなからうか。

青田美砂は「ミカリには、祖神の狩りに関する伝説が伴っていることが多い。狩りの伝説は、もちろんミカリという名称の発音からの連想で、後世加えられたものであるうが、どの伝説も狩りをしたことによって、安心して農耕ができるようになったことが強調されているのは、理由のあることと思われる。地域によっては、その狩りをした神が農作物を伝えたともいっている。（下立松原神社では、狩りをした神は同時に麻の栽培を教えたことにもなっている。）つまり、神はただ狩猟をしたのではなく、農耕を發展させるために狩りをしたわけである。」と指摘している。確かに、『洲宮神社縁起』でも、神狩の後、「ここにアメノトミノ命国巡にゆぐりゆき、よきところをもとめて麻穀の種を蒔かしめ給ふ。よく生長ぬ。かれ穀のいと美しく生ふる地を穀木（ゆふき）と、また麻のいと美しく生ふる地を長麻（ながあさ）と名づく。また狭布佐（けふさ）と名づく。かれ布佐（ふさ）は麻の古語にして、おもに国の名を繪（ふさ）といふはこの縁なり。また阿波国忌部の居る地は安房といふ。」とある。神狩によって、麻が豊穰になり、豊かな安房の国が誕生したという筋書きである。つまり、神話的過去の再現としての神狩神事は作物の豊穰に繋がっていく意味を持っているといえる。しかも、儀礼の上でも、神狩神事の後に、稲作の豊穰を予祝する御田植神事が続くことになる。

#### 四、御田植神事

御田植神事は御田植祭とも呼ばれるが、山路興造によると、一般には、実際の田圃に早乙女が苗を植えて豊作を願う神事をお田植祭、年の初めに一年の稲作過程を模擬的に演じて、秋の豊穰を祈る神事を御田・田遊びの名称で

呼んで区別されるといふ<sup>(38)</sup>。洲宮神社の御田植神事は、元旦に執行され、後者の御田・田遊びに当たる。

## (一) 研究史

洲宮神社の御田植神事を扱った研究には、館山市史編纂委員会の研究<sup>(39)</sup>、千葉県神社庁特殊神事編纂委員会の研究<sup>(40)</sup>、中嶋清一の研究<sup>(41)</sup>、小川直之の研究<sup>(42)</sup>があり、いずれの研究も神事の式次第を報告しているが、中嶋と小川の研究は安房神社との関連についても触れている。中嶋は、安房神社でも洲宮神社と同種の「神田祭」を一月一日～三日に行っていたと安房神社との類似を指摘している<sup>(43)</sup>。これに対して、小川は、「香取神宮・安房神社の御田植祭は、実際の田植え前、あるいは直前であるのに対し、館山市の洲宮神社の御田植神事は元旦の行事になっている。」と違いを指摘している。

一方、森谷ひろみは、御田植神事を直接は扱っていないが、式内社「后神天比理乃咩命神社」の比定の分析の中で「洲宮神社の「御田植神事」は、安房神社との関係をもって挙行しているなど、神事の時にもあるいはその他の諸行事においても、両社は互に神幸している。」と指摘している<sup>(44)</sup>。

そこで、本章では、祭の実際を概観した上で、御田植神事の形式にも留意しながら、従来、研究されて来なかった「南三社」の視点から検討してみたい。

## (二) 御田植神事の実際

洲宮神社の御田植神事は、元旦の一時に社殿での祭典から始まる。祭典は型通りのものであるが、洲宮神社宮司が祭主を務め、厳粛に行われる。神前には、神事に使う粉・苗に見立てた松葉・耳餅・鉞(竹)等<sup>(45)</sup>を供え、洲宮区長や氏子総代のほか、神事で活躍する作代(作男ともいう)と牛役は一緒に玉串を奉げる。牛役は新婚の男性が、作代は古老の中から選出される。祭典が終わると、拜殿前の庭に舞台を移し、祭事の主役も神職から作代に代わ

る。また、神前に供えられた粉・苗に見立てた松葉・耳餅二枚は、拜殿前に用意された案の上に置かれる。牛役は、拜殿の裏側に隠れて出番を待つ。

御田植神事の開始の挨拶が告げられ、まず竹の鉞が子どもたちを中心とした参列者に配られる。作代は案の後ろに立つ。鉞が行き渡ると、作代が「月もよし日もよし神の御田植申す」と三回唱え、参列者は、鉞で耕す所作をする。終わると、鉞は回収される。次に、作代が「向う見れば遠音かぐらの音ぞする」(三回)、「くう立ちの如くほえばえと」(三回)と唱え、新米の粉を境内に向って蒔く。終わると、杖と唱え言の書かれた紙を付けた三方の蓋を持つ。そして、作代が「奥山のねざさにくいついたる牛を」(一回)と「呼べども呼べどもまだ来ない」(三回)、「ペーコ ペーコ」と唱え、杖で三方の蓋を叩きながら、牛を呼ぶ。すると、拜殿の裏側から、布を被った牛役が現われ、勢いよく境内に飛び出し、聴衆の間を捕まらないように逃げる。作代が牛を「逃すな、捕まえろ!」と聴衆に促す。この牛が「安房神社まで逃げていくと、安房神社から送ってくるので、接待をしなきゃいけない。だから、「逃すな」と言う<sup>(46)</sup>」との伝承がある。捕まえられた牛は作代の前に引き出されて、作代



写真5 御田植神事の牛 (平成21年撮影)  
写真6 作代の苗を植える所作 (平成21年撮影)

は耳餅を二つ三方から取り、被った布の間から牛役の両側の耳を撫でる。さらに、作代は案に供えた苗を参列者に配る。そして、作代は、「月もよし日もよし神の御田植申す」と三回唱え、作代と参列者が手に持った苗を投げ合い、神事は終了する。最後に、参列した子どもたちにもかんが配られる。耳餅は作代と牛役が一つずつ持ち帰る。

### (三) 南三社の連関

ここで注目すべきは、洲宮の御田植神事の牛が逃げると安房神社まで行ってしまい、安房神社の側でも逃げていった牛を送ってくれるという伝承である。ここからは、洲宮神社の御田植神事が牛を媒介にして安房神社へ繋がっていることが暗示される。

『安房座社傳記』によれば、安房神社の恒例神事の中に、「正月朔日 御田、神事 瀧口ノ社人等行之、<sup>(49)</sup> 同日 於瀧口ノ社ニ亦此式アリ、今絶テナシ」とあり、かつて安房神社でも御田神事を、洲宮神社と同じ元旦に行っていたことがわかる。しかも、「瀧口ノ社」、即ち、下立松原神社(白浜町滝口)の社人が安房神社で御田神事を行い、正月三日に、「此式」とあることから、今度は自分たちの下立松原神社で御田神事を行っていたことがわかる。つまり、御田神事の詳細は不明だが、下立松原神社の御田神事が安房神社と同じ形式のものといえ、下立松原神社の御田祭から推測が可能といえる。

小川直之は、洲宮神社の御田植神事と同じ形式のものとして、下立松原神社の御田祭を挙げ、「元旦から三日にかけて行われている「御田祭」は、三日に早乙女が竹の先に鍬の餅をさして鍬に見立てて持ち、牛に扮した人が登場して神職に使われて田うないのまねをし、杉の葉を苗に見立てて植えるまねをする神事<sup>(50)</sup>」として紹介している。また、下立松原神社神職の高山義陳によれば、正月元旦は「御田祭」と称して、洗米・米・鏡餅・鍬の餅(一二個)・廻り餅(一二個)を神饌として祈願祭を行い、二日も同様の祭祀を行い、三日は「田耕の神事」と称し、祭典終了後に参列者一同が大庭に整列して行い、

神事の詳細は、小川の研究と同様のものが報告されている<sup>(51)</sup>。ここからは、かつては安房神社でも、下立松原神社・洲宮神社と同じ稲作の作業過程を模倣的に演じる御田植神事(「御田神事」)を行っていたことが窺える。

とすると、元旦に洲宮神社の牛が逃げていく先の安房神社でも御田植神事が行われていたことになる。そして、その場には神事を執行了した下立松原神社の社人もいて、その社人は正月三日には下立松原神社で御田植神事を行った。つまり、洲宮神社の御田植神事は、神事の牛を媒介として、安房神社・下立松原神社の御田植神事と連関しているといえる。このことは、神狩神事と同様に、御田植神事においても南三社が密接に連関していることがわかる。また、元旦に安房神社・洲宮神社の夫婦神が揃って御田植神事を行うということは、洲宮神社は安房神社の「后神」としての性格を儀礼の上でも有しているといえる。

### (四) 『洲宮神社縁起』との関連

先に述べたように、『洲宮神社縁起』には、神狩によって、麻が豊穰になり、豊かな安房の国が誕生したという筋書きが書かれている。縁起との関連で、大変興味深いのは、神狩神事に先だって、安房神社から下立松原神社へ弓と的場が渡され、鹿倉山での狩の真似と奉幣を行うが、御田植神事においては、反対に下立松原神社の社人が安房神社へ赴き、御田植神事を行うから、下立松原神社へ帰って御田植神事を行うことである。つまり、安房神社から渡される弓と的場で神狩を行った下立松原神社の社人が安房神社で御田植神事を行うことである。このことは、神狩神事によって「身変り」した社人が御田植神事を執るといえる。そう考えると、洲宮神社においても、神狩神事において安房国開拓の始原を再現して「身変り」をした洲宮の人たちが元旦に御田植神事を行い、稲作の豊穰が予祝されたといえる。このことは、『洲宮神社縁起』の再現であると同時に、神狩神事と御田植神事はセットで捉えられ、関係性の深い南三社で執行されたとも解釈できる。



## 五、例祭（洲宮のマチ）

洲宮神社の例祭は、洲宮の人たちに「洲宮のマチ」と呼ばれ、現在は八月の第一日曜日に行われている。午前中に神社で祭典を行い、午後から神社神輿と子ども神輿の渡御を行う。特に、明神山という御旅所へ神輿が渡御し、そこでの神事を「お浜入り」（御浜出神事）と称している。

### （一）研究史

例祭については、歴史地理学の森谷ひろみの卓越した研究<sup>(53)</sup>がある。森谷は実地調査から式内社「后神天比理乃咩命神社」を洲宮神社に比定している。その中で、『洲宮神社縁起』に記載された、天比理乃咩命が飯長姫命に「白波の来寄するうまし小浜に吾が宮地なせ」と命じた神話を踏まえ、歴史地理学的視点から、魚尾山より以前の最初の鎮座地として、御旅所の明神山を位置付けている。また、洲宮神社に伝わる祭祀遺物（有孔円板・勾玉・土玉の土製模造品、手捏土器、土師器杯など）は明神山付近から出土したものであると推定している。そして、この明神山こそが「白波の来寄するうまし小浜」であり、『延喜式』神名帳の「后神天比理乃咩命神社」の註にある「元名「洲神」」に相応しい場所として位置付けている。但し、祭そのものについては、洲宮神社宮司（当時）の小沢恭司の話などを報告しているものの、例祭の構成や全体像については明らかにされていない。また、森谷以外に例祭を扱った研究はない。

そこで、本章では、例祭の実際を明らかにした上で、『洲宮神社縁起』との関連を踏まえながら、例祭の意味について分析してみたい。

### （二）例祭（洲宮のマチ）の実際

ここでは、実地調査を行った平成二二年八月八日（日）の調査データを基に見ていきたい。

〔神社での祭典〕

例祭の祭典は祓所での修祓の後、社殿内で型通りのもの<sup>(57)</sup>であるが厳粛に執行される。玉串奉奠は、神社総代、洲宮区長、藤原区長、房南中学校校長、神戸小学校校長、大田区立館山さざなみ小学校校長、児童養護施設・ひかりの子学園園長、J A安房神戸支店長、神輿団長、楽人四名らが行う。撤饌の後、本殿から神社神輿へ御霊遷しを行い、約四〇分に及ぶ祭典は終了する。祭典の後、洲宮青年館で直会となる。

〔現在の神輿渡御ルート〕

午後から一三時半の出御に向けて、時間が近づくにつれて神輿の担ぎ手たちが続々と神社に参集し準備がなされる<sup>(58)</sup>。そして、以下のルート<sup>(59)</sup>で神輿の渡御が行われる。担ぎ手たちはそれぞれの場所で休憩を取る。

洲宮神社（一三時半発）↓お浜入り（祭典・一四時～一四時半）↓ひかりの子学園（休憩）↓与作（休憩）↓藤原神社（休憩）↓鹿島屋（休憩）↓ヤマト佛商会長宅（休憩）↓谷藤原青年館（休憩）↓洲宮神社（一九時着）

神輿渡御は、「洲宮神社」と書かれた高張提灯二本を先頭に、子ども神輿、神社神輿の順に行列しながら行う。途中、神社神輿は「お花代」を沿道の家から頂くと神輿を高く上げる「サシ」<sup>(60)</sup>や、休憩場所などで神輿を左右に大きく揺する「モミ」<sup>(61)</sup>を行う。また、神輿は担ぐだけでなく、所々で専用の台車<sup>(62)</sup>に載せて巡幸する。

〔お浜入り〕

神社を出た神輿は、洲宮川沿いの道を海に向かって進み、最初に明神山（御旅所）に渡御する。明神山は砂丘の一番高いところで、小高い丘になっている。ここで「お浜入り」（御浜出神事）と呼ばれる祭典を行う。神社神輿と子ども神輿を明神山の頂上付近に台車に載せて置き、三台の神饌（塩・水、米、

御神酒)を奉る。そして、洲宮神社宮司による厳肅な祭儀が執行される。式次第は、①修祓(神社神輿↓総代会長↓洲宮区長以下参列者↓神社神輿担ぎ手↓子ども神輿担ぎ手↓他参列者)、②祭主一拝、③献饌、④祝詞奏上(「御旅宮」の文言あり)、⑤玉串奉奠(祭主↓総代会長↓洲宮区長以下四名↓神輿団長以下二名)、⑥撤饌、⑦祭主一拝、⑧終了の挨拶で約八分の神事は終了する。この間、神輿の担ぎ手たちはビールなどを飲みながら休憩している。

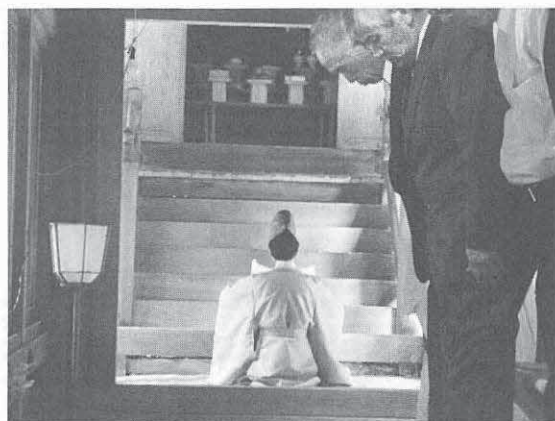


写真7 例祭の祭典(平成22年撮影)

写真8 明神山の「お浜入り」(平成22年撮影)

〔藤原神社・魚尾山の近辺・谷藤原への巡幸〕

明神山を出た神輿は、ひかりの子学園を経て、隣接する布沼との境の住宅地を通り、明神山の近くの居酒屋・与作で休憩した後、藤原神社へ向かう。

藤原神社の隣には、藤原集会所があり、そこで藤原区長や藤原の人たちが神輿を出迎える。洲宮の担ぎ手たちは藤原神社前に神輿を置くものの藤原神社へ参拝する人はいない。藤原神社の背後には、洲宮神社の旧社地・魚尾山がある。

藤原神社を出ると、国道四一〇号線を館山駅方面に向かって魚尾山の脇を

進み、魚尾山への参道の入口を過ぎて鹿島屋で休憩する。その後、洲宮神社前を通過し、国道四一〇号線に沿って流れる洲宮川の上流に当る谷藤原へ向かう。途中、ヤマト佛商会長宅で休憩する。子ども神輿は、会長宅を出ると、神社神輿と別れて一足先に洲宮神社へ還御する。

神社神輿は、会長宅を出ると洲宮川の上流(運動公園)に近い谷藤原青年館に渡御する。この頃になると時刻は一八時を過ぎ、暗闇が迫る。谷藤原青年館を出た神社神輿は洲宮神社へ一九時過ぎに還御し、担ぎ手たちは神輿を神社へ納めてから、洲宮青年館前で直会を行う。一方、神社では一九時半頃から洲宮神社宮司によって御霊返しが行われ、例祭は終了する。

### (三) かつての例祭(安房神社への神幸祭)

現在、例祭は八月第一日曜日の日で行っているが、かつては八月九日(一日の三日間の日程で行い、安房神社への神幸祭も行われていた。具体的には、まず、八月九日に洲宮神社から安房神社へ神輿が渡御し、安房神社で一泊した。安房神社へは、洲宮神社・下立松原神社・布良崎神社・熊野神社(白浜町)・日吉神社・相浜神社・犬石神社・八坂神社・熊野神社(佐野)の合計九社の神輿が入祭した。翌一〇日は、安房神社例祭の祭典が執行され、夕方、安房神社の神輿は相浜神社の神輿に先導されながら相浜(古くは、平砂浦の巴原)まで浜降してそこで「夕日の祭典」と称される祭典を行った。

洲宮神社の神輿は、相浜へは行かずに安房神社から洲宮神社へ還御した。翌一日は、洲宮神社の例祭で午前中祭典を行った。神輿は、夕方涼しくなつてから藤原の神楽と一緒に明神山へ「お浜入り」をした。明神山では一九時頃、暗がりの中で総代役員が灯した提灯を頼りに宮司が祝詞奏上をして「お浜入り」の神事が執行され、藤原の神楽の奉納もなされたという。明神山を出た後、布沼集落との境の雑貨屋、藤原集落の藤原神社や藤原区長宅、谷藤原集落の谷藤原青年館や谷藤原区長宅などを巡幸して、二三時頃に洲宮神社に還御した。その後、安房神社への神輿の往復が八月九日の朝に出て夕方に

帰る形になり、八月九日・一〇日の二日間に短縮された。そして、昭和二九年に旧神戸村各区が館山市に合併した際に、氏神の祭礼日を安房神社の例祭日（八月一〇日）に統一したのを境に、洲宮神社も安房神社への神幸祭を行わなくなった。<sup>(67)</sup>その後、夜の明神山への「お浜入り」から昼の「お浜入り」に変化して現在に至っている。<sup>(68)</sup>

#### (四) 『洲宮神社縁起』の再現

ここでは、かつての例祭の祭構成と『洲宮神社縁起』がどのように関わっているか検討してみたい。『洲宮神社縁起』では、神狩の後、天富命によって麻が栽培され、豊かな安房の国が誕生し、天富命が安房国の祖神の神霊を降ろして安房郡に宮地を定めて瑞の正殿を造って祀るという物語が続く。そして、安房の大神（安房神社）を祀った後に、洲宮神社の創建に関わる神話が続く。

「然るのちアメノトミノ命おのが子イイナガヒメノ命をもちて御手代となし崇め敬ひて祭りたまふこと天の上の行事（わざ）の如くなり。此の時、大刀自（おほとじ）アメノヒリメノ命イイナガ姫につきて誨（おしへ）て云ふ。白波のきよするうまし小浜に吾が宮地をなせといふ。かれアメノトミノ命租神の誨のまにまに神所を見立てて、アメノヒリメノ命の持ち給へる真鍮（まがね）のまふつの鏡を神身（かみたから）となし、また神幡（かみはた）のくさぐさを取り揃へて神しずまりさせイイナガ姫をして齋き奉らしめ給ふ。洲の神また洲の宮となへまつるは洲のほとりにいますゆえなり。また安房大神此神と毎年に御船をならべて海原に神遊し給ふ。かれ其船の往会へる地は相浜なり。」<sup>(69)</sup>とある。天比理乃咩命が飯長姫（天富命の孫）に命じて祀った「白波のきよするうまし小浜」洲のほとり」が洲宮神社の創祀の始原といえる。森谷ひろみは、既に述べたように明神山を「宮地」に比定しているが、それを裏付ける伝承がある。明神山は館山市洲宮の白帖<sup>しろはき</sup>という地籍にあるが、近くに白帖という屋号を持つ家が存在する。この家の先祖が洲宮に移り住ん

だ当時、家の付近から下は砂浜であったといい、砂浜にはびっしりと白帖（白萩）が生えていたとの伝承<sup>(70)</sup>がある。実際に付近の畑を三〇m程掘ると大きな蛤が出土するという。また、洲宮川が茂名から流れる支流と合流する付近を潮の分かれ目を意味するダシワケと呼ぶという<sup>(71)</sup>。つまり、森谷が指摘するように、かつての明神山は正に「洲神」の名称に相応しい景観にあり、そこに「お浜入り」をすることが安房国開拓当初の洲宮神社創祀・創建の始原を再現することであったといえる。しかも、かつては安房神社の例祭に入祭した後、明神山へ「お浜入り」していて、『洲宮神社縁起』における「安房の大神」の鎮座の後、「白波のきよするうまし小浜」に鎮座した物語の筋とも対応している。しかし、例祭は「洲神」の始原を再現するのみに留まらない。

明神山で「洲神」を再現した後、藤原神社のある藤原集落と谷藤原集落を神輿が巡幸する。藤原と洲宮は密接な関係を持ち、かつて谷藤原は藤原と同じ地区であった。また、洲宮と藤原の境には、洲宮神社の旧社地・魚尾山があり、この近くを神輿が巡幸していく。見方によっては、明神山↓魚尾山↓現・洲宮神社と鎮座した順番に神輿が巡幸しているように見える。一方、洲宮集落の水田や畑に水を供給する洲宮川の下流に位置する「明神山」<sup>(72)</sup>《海》から洲宮川の上流の水源に近い「谷藤原」<sup>(73)</sup>《山》まで神輿が巡幸することは、菑田稔の「風土祭祀」という観点から大変興味深い。

#### (五) 洲宮神社例祭のドラマ

このように、例祭の筋書きを見てみると、后神・天比理乃咩命を祀る洲宮神社の神輿が、夫神・天太玉命を祀る安房神社へ渡御し、「夫婦神」が一体となった後、明神山へ「お浜入り」をして、洲宮神社の創祀・創建たる「洲神」の始原を再現した。そして、明神山↓魚尾山↓現・鎮座地と、洲宮神社の「歴史」を確認しながら、洲宮と関わりの深い藤原・谷藤原の集落を巡って、共同体が再生していったといえる。また、神輿の巡幸を洲宮の風土・景観の中に位置づけて考えると、洲宮の水田や畑に水をもたらす洲宮川の下流

に位置する「明神山」＝《海》と、上流の水源に近い「谷藤原」＝《山》への渡御によって、「海と山との交歓」<sup>(8)</sup>がなされ、新たな神霊の誕生がなされたのかもしれない。つまり、洲宮神社の風土・景観の中で、「洲神」の始原の再現と洲宮神社の「歴史」の確認、洲宮川を媒介とした「海と山との交歓」によって、新たな神霊の誕生と共同体の再生のドラマが演じられたといえる。

## 六、やわたんまち（安房国司祭）

館山市八幡に鎮座する安房国の国府総社・鶴谷八幡宮の「やわたんまち」（安房国司祭）は、現在、九月敬老の日の直前の土日（以前は九月一四・一五日）に開催されているが、洲宮神社の他、安房神社・下立松原神社・莫越山神社・手力雄神社・山宮神社・山荻神社・木幡神社・高皇産霊神社・子安神社の合計一〇社の神輿が入祭を行う。本章では、洲宮神社の複数の祭祀・祭礼の把握という観点から洲宮神社に焦点を絞って、「やわたんまち」を見てみたい。

### (一) 研究史

入祭する洲宮神社の視点から「やわたんまち」を分析した研究はないが、洲宮神社の入祭について比較的詳細に記録した先行研究としては、館山市史編纂委員会の研究、中嶋清一の研究<sup>(9)</sup>、松崎憲三の研究<sup>(10)</sup>、田村勇の研究<sup>(11)</sup>がある。特に、松崎は安房神社と洲宮神社が鶴谷八幡宮への入祭に当って、奉幣式を行う新宿神明社とのお船について詳細に分析した上で、「安房神社と洲宮神社の神々は夫婦といい、さらにそれらの神々（神輿）の渡御に新宿の山車加わる、という形で祭りは進行するが、これらの三地区の人々は互いに親和感を抱いている。」<sup>(12)</sup>と指摘している。ここからは、安房神社と洲宮神社が「夫婦」の関係を「やわたんまち」の中で演じている可能性を示唆している。

そこで、本章では、洲宮神社の入祭の実際を確認した上で、これらの先行研究に学びながら、洲宮神社の「やわたんまち」について明らかにしてみた

い。

### (二) 鶴谷八幡宮への入祭

ここでは、実地調査を行った平成二二年九月一日（土）のデータを基に見ていきたい。入祭日の当日、洲宮神社で七時半から祭典・御霊遷しが行われる。その後、神輿は大型トラックに積み込まれ、八時二〇分、洲宮神社出発の予定で館山病院まで運ばれる。担ぎ手たちは洲宮神社から貸切バスで移動する。洲宮神社の神輿の到着前には、安房神社の神輿も館山病院にトラックで運ばれ、八時二八分頃、洲宮神社の到着より一足早く巡幸を開始する。安房神社の担ぎ手によれば、「洲宮神社の神輿は安房神社の神輿を追い抜いてはいけない。」といわれ、館山病院からの出発も安房神社が先となる。八時三四分頃、洲宮神社の神輿は館山病院から出発する。館山病院から鶴谷八幡宮までの渡御ルート・予定時刻は以下の通りである。

館山病院前→下町交差点→汐留橋交差点→中村神仏具店（休憩、安房神社の後に出発）→汐留橋交差点→長須賀交差点→島野美容室→オクヤ→長須賀交差点→神明社（奉幣式、九時四五分→一〇時三〇分）→南町交差点→杉井工業駐車場（休憩）→北条交差点→館山信用金庫（休憩）→北条交差点→千葉銀行→ピース製菓→みなどや→J A安房北条支店（昼食）→計工務店→鶴谷八幡宮交差点→鶴谷八幡宮（一三時二〇分着）。

八時四五分頃、洲宮神社の神輿が休憩場所の中村神仏具店に着くと、既に安房神社の神輿が到着していて、両神社の神輿は激しく神輿を左右に揺らし、「モミ」をしてから、神輿を並べて降ろして休憩となった。九時五分頃、安房神社の神輿が先に出発し、九時一五分頃、洲宮神社の神輿も一度、神輿を高く上げる「サシ」をしてから出発となった。洲宮神社の担ぎ手たちの間でも「オヤジの神輿は追い越してはいけない」とか「旦那の神輿は追い越してはいけない」といわれ、安房神社の神輿を追い越さないように細心の注意を払っている。そして、しばらく安房神社の神輿と洲宮神社の神輿は別々に巡

幸しているが、再び新宿神明社で一緒となる。

〔新宿神明社・奉幣式〕

九時五〇分頃、洲宮神社の神輿が新宿神明社の入口まで来ると、そこでは新宿町のお船「神明丸」がお囃子を奏でながら待っている。ひとしきり神明丸に向って「モミ」をした後、神明社の鳥居から社殿前まで駆け入る。既に境内には安房神社の神輿が待っていて、ひとしきり両神社で「モミ」合った後、忌竹を立てて注連縄を張り、安房神社と洲宮神社の神紋が入った垂幕を掛けた御仮屋に安房神社の神輿と一緒に並んで安置される。神輿を降ろした後、洲宮神社の青年団長と神明丸の曳き手が挨拶をして御神酒（一升）を交換し、担ぎ手は休憩となる。

一〇時から新宿神明社社殿で、奉幣式が行われ、安房神社宮司、洲宮神社宮司、神明社宮司が同席する。奉幣式は、ヒイレ（幣入れ）と呼ばれ、①開始の挨拶、②修祓、③奉幣、④安房神社総代拝礼、⑤洲宮神社総代拝礼、⑥神明神社総代拝礼、⑦新宿町内会拝礼、⑧新宿世話人代表拝礼、⑨終了の挨拶の順番で行われた。奉幣（ヒイレ）では、安房神社宮司が洲宮神社宮司・神明社宮司立会いの下、神前に幣束は大幣束を一基、三本立ての幣束を一基、小幣束を一基奉った。この内、三本立ての幣束は、中央が安房神社、左右が洲宮神社・下立松原神社であるという。この三本立ての幣束は翌一九日（日）に神明丸の舳先に付けられるという。また、小幣束一基は、奉幣式の終了後、新宿世話人によって神明丸の舳先へ付けられていた。大幣束はそのまま神明社の本殿に供えておく。安房神社の宮司が幣束を切って、この奉幣式（ヒイレ）を行い、安房神社と洲宮神社の神輿が出ないと神明丸は出られないという。

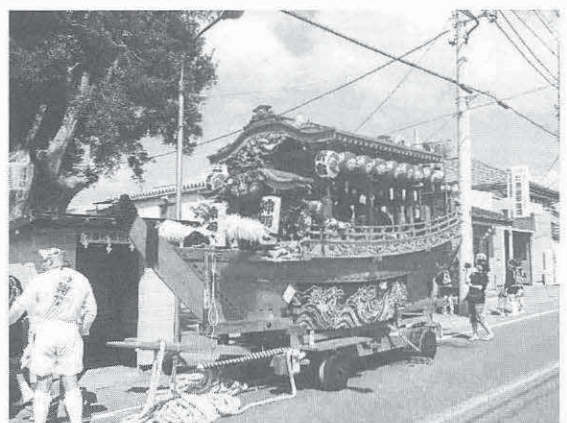


写真9 神明社御仮屋の安房・洲宮神社神輿（平成22年撮影）  
写真10 神明社前の「神明丸」（平成22年撮影）

一〇時二三分頃、安房神社の神輿が先に神明社のお仮屋から出御、一〇時三五分頃、洲宮神社の神輿も御仮屋から出されて、神明社の入口に止められた神明丸の前でひとしきり「モミ」や「サシ」をしてから、再び巡幸を開始する。途中、「花代」を頂いた家の前で「サシ」をしながら進む。昔は交差点でも「モミ」をしたが、現在は警察の取締りの関係もあり行われていないという。杉井工業駐車場、館山信用金庫で休憩、J A安房北条支店で昼食の後、いよいよ鶴谷八幡宮へ宮入りする。この宮入りの際も、洲宮の神輿団長がしきりに安房神社の神輿を追い越していないかどうかを何度となく確認していた。一三時一〇分、鶴谷八幡宮の一の鳥居を潜ると露店が並んだ参道をしばらくはゆっくりと進むが、二の鳥居から本殿前までは一気に駆け込み、本殿前で「サシ」をする。そして、神輿を安置する御仮屋（長宮）へ向かうが、安房神社遥拝殿の前には、安房神社の神輿が待っていて、洲宮神社の神輿と互いに「サシ」や「モミ」をして祭の熱気が一気に高まり、一五分程度、両神社の神輿の掛け合いが続く。終わると、一三時半頃、安房神社の神輿は遥拝殿へ、洲宮神社の神輿は御仮屋の一番左に入った。入祭する神社の中で、

安房神社と洲宮神社が最初に着御する。御仮屋には、洲宮神社の他、下立松原神社、手力雄神社、山宮神社、山萩神社、莫越山神社、木幡神社・高皇産靈神社・子安神社の神輿が入る。安房神社遥拝殿では着御祭がなされる。洲宮神社の担ぎ手たちは、宮番に神輿の警護を任せて、洲宮神社の宿であるY家に向い、そこで直会の後、翌日の還御（一五時半の宿への集合）まで解散となる。宮番は、宿のY家に泊まりながら、翌日の一七時の出御まで二時間交代で神輿の番をする。

### 〔六所祭〕

一九時過ぎから、鶴谷八幡宮・宮司宅客殿で「六所祭」が執行される。洲宮神社は洲宮神社宮司と氏子総代の二名が参列する。洲宮を含む「やわたんまち」に入祭した全一〇社が参列し、鶴谷八幡宮宮司と神職が祭典を執行する。祭典は型通りのものであるが、鶴谷八幡宮宮司が奏上する祝詞には、「安房神社をはじめ、洲宮神社、下立松原神社、手力雄神社、山宮神社、山萩神社、莫越山神社、木幡神社、高皇産靈神社、子安神社、合わせて一社の大神たちの大前に」との文言が入っている。この神社の順番は、還御の際に鶴谷八幡宮から神輿が出御する順番と同じである。玉串奉奠は祭主（鶴谷八幡宮）と当番神社（平成二二年は安房神社）が行う。祭典が終了すると、客殿で引き続き直会となる。

### 〔三〕 鶴谷八幡宮からの還御

ここでは、実地調査を行った平成二二年九月二〇日（日）のデータを基に見ていきたい。

### 〔三社祭（大屋の御神酒）〕

一五時頃、洲宮神社の宿に、洲宮神社宮司が到着する。一五時半頃になると神輿の担ぎ手たちも集合し、氏子総代とともに宿の片付けを行う。

一五時五〇分、洲宮神社の一行は、「三社祭（大屋の御神酒）へ参列するため、宿を出発する。「洲宮神社」と書かれた高張提灯を先頭に、宮司と青年団役員ほか一〇人程度が行列して、「大屋（鶴谷八幡宮・宮司客殿宅）へ向う。安房神社・洲宮神社・下立松原神社の三社の宮司は客殿の中に入り、青年団は外で待機する。建物に向かって、右側が安房神社、中央が洲宮神社、左側が下立松原神社の順に、それぞれ縦列に並ぶ。

一六時、安房神社・洲宮神社・下立松原神社の宮司三名が揃い、鶴谷八幡宮宮司（以下、八幡宮宮司）の到着を待つ。八幡宮宮司が到着すると、八幡宮宮司から安房神社宮司↓洲宮神社宮司↓下立松原神社宮司の順に御神酒を受け。

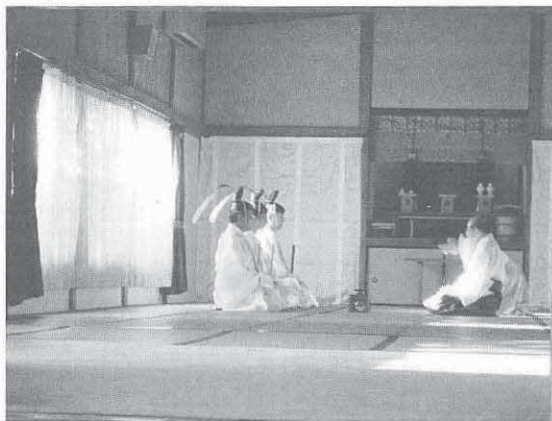


写真11 御神酒を頂く南三社宮司（平成21年撮影）



写真12 客殿前の南三社青年団（平成21年撮影）

一六時一〇分頃、客殿内での盃時が終わると、八幡宮宮司と三社の宮司が揃って外に出る。八幡宮宮司より「事故なく御還御できるように」との趣旨のお話がなされ、まず安房神社の青年団に御神酒が配られる。安房神社の青年団に神職が一人ずつ御神酒を湯呑茶碗に注いでいき、頂いた御神酒を飲み干す。安房神社の青年団は、飲み干した湯呑茶碗を洲宮神社の担ぎ手に渡す。

次に、八幡宮の神職が洲宮神社の青年団に御神酒を注ぎ、頂いた御神酒を飲み干す。洲宮神社の青年団は飲み干した湯呑茶碗を下立松原神社の青年団に渡す。最後に、八幡宮の神職が下立松原神社の青年団に順々に御神酒を注いでいき、頂いた御神酒を飲み干す。この御神酒は、安房神社の青年団によると、鶴谷八幡宮の旧鎮座地といわれる元八幡（三芳村）の清水を汲んで、お酒に混ぜて作られるといい、この御神酒を飲んで「水が流れる如く帰ってくださいよ」といった意味があるという。一六時一六分頃、八幡宮宮司から安房神社へ「還御の道中の安全とまた来年の再会を約して」といった挨拶がなされ、安房神社宮司と青年団は、宮司宅客殿から神輿を安置した安房神社遥拝殿へ向かう。同様の挨拶が洲宮神社、下立松原神社の順になされ、両神社の青年団は神輿のある御仮屋に向かう。④ こうして三社祭（大屋の御神酒）は終了する。

#### 〔鶴谷八幡宮からの還御〕

三社祭が終わると、いよいよ還御となる。鶴谷八幡宮からの還御は、安房神社↓鶴谷八幡宮↓洲宮神社↓下立松原神社↓手力雄神社↓山宮神社↓山萩神社↓莫越山神社↓木幡神社↓高皇産霊神社↓子安神社の神輿の順で行われる。洲宮神社の神輿は以下の巡幸ルート・予定時刻で還御する。

鶴谷八幡宮（一七時四〇分発、待機二〇分）↓安房高校↓六軒町・諏訪神社（休憩、一八時二五分〜一八時五五分）↓嶋屋↓北条交差点↓広井ガラス（休憩、安房神社神輿通過待ち）↓波奈寿司↓いわし照（休憩）↓北条海岸（二一時三〇分）↓（トラック輸送）↓洲宮神社。

一七時過ぎ、安房神社の神輿が遥拝殿から出て、遥拝殿や御仮屋前付近で三〇分近く「モミ」や「サシ」をしてから出御した。続いて、鶴谷八幡宮の神輿も二〇分程度「モミ」や「サシ」をして出御する。一七時五〇分頃、洲宮神社の神輿も御仮屋から出されて、遥拝殿や御仮屋前付近で二〇分以上「モミ」や「サシ」をして、激しい熱気に包まれる。そして、沢山の観衆が見守

る中、本殿前から二の鳥居まで疾走して出御となった。既に辺りは暗くなっている。

一八時三七分頃、六軒町の諏訪神社に着くと、既に安房神社の神輿が待っていて、ここで再び合流し、安房神社の神輿の隣に洲宮神社の神輿が降ろされる。先に諏訪神社に着いた安房神社の担ぎ手は洲宮神社の神輿の応援に来る。一九時過ぎに安房神社の神輿が諏訪神社から出発した後、一九時一四分頃、洲宮神社の神輿が出発となった。還御においても、安房神社の神輿を洲宮神社の神輿は追い越してはいけないという。一九時四五分頃、休憩場所の「広井ガラス」に到着する。ここで休憩中に、二〇時一三分頃、安房神社の神輿が休憩場所の前の道を通り過ぎた。その際、それまで座って休息していた洲宮神社の担ぎ手はそれを立って見送る。そして、二〇時二〇分頃、再び出発となった。途中、安房神社の神輿に接近するが追い越すことはない。二〇時五〇分過ぎに、休憩場所の炉端焼「いわし照」に到着し、先に着いていた安房神社の神輿と激しく「モミ」合ってから休憩となった。その後、安房神社と洲宮神社の神輿は北条海岸まで進み、そこからトラックでそれぞれ還御となった。

#### 〔四〕オサメ

翌日、八時半に洲宮神社に集合して、神輿の掃除など片付けを行う。また、午前中に洲宮神社役員と青年団役員が休憩所に挨拶回りを行うが、最初に大神宮青年団（安房神社の青年団）にお礼の挨拶に行く。そして、一三時から洲宮青年館でオサメ（直会）を行う。こうして、洲宮神社の「やわたんまち」は終了する。

#### 〔五〕「后神」を演じる洲宮神社

このように、洲宮神社の視点から「やわたんまち」を見てみると、洲宮神社は安房神社と一対となって、鶴谷八幡宮への入祭及び鶴谷八幡宮からの還

御を行っていることがわかる。特に、「オヤジの神輿を追い越してはいけない」、「旦那の神輿を追い越してはいけない」との伝承からは、「オヤジ」「旦那」を指す安房神社は「夫神」で、洲宮神社はその反対の「后神」であるということごとを洲宮神社の担ぎ手は認識している。しかも、その認識は安房神社の神輿の担ぎ手にも共有され、受け入れられている。但し、それは単に、安房神社の祭神が天太玉命で、洲宮神社の祭神が天比理乃咩命であるから「夫婦」であるという知識だけではない。そこには、安房神社の神輿が洲宮神社の神輿に「追いかけられると切なく」て、洲宮神社の神輿が安房神社の神輿から「離れると切ない」という伝承からも窺えるように、安房神社と洲宮神社の神輿は、一定の距離感を保ちながら、「男」と「女」、「夫神」と「后神」を祭の中で演じるといった劇的構成があるからだといえる。言い換えれば、安房国開拓の神話を重視する安房神社と洲宮神社にとっては、安房国開拓の始原とは直接関わらない「やわたんまち」において、安房国開拓の始原に関わる「夫婦神」という筋書きを演じること、後着の鶴谷八幡宮に対して、自分たちの先着の意味を誇示しているのかもしれない。

## (六) 南三社の連関

もう一つ重要な問題として、「やわたんまち」においても安房・洲宮・下立松原神社の「南三社」がセットで現れることである。特に、新宿神明社の奉幣式と三社祭（大屋の御神酒）が象徴的といえ、ここではこの二つの儀礼に注目してみたい。

まず、新宿神明社の奉幣式（ヒイレ）であるが、田村勇は「ここで幣束を納め休息をとるのは、かつて、ここより南三社と呼ばれる安房・洲宮・下立松原神社の三社が船で渡御してここに上陸して鶴谷八幡宮に向ったからである」という伝承を報告している。また、松崎憲三は、「かつて安房国へ神々が海を渡り、開拓し、豊かになり、忌部一族によって建てられた安房神社・洲宮神社・下立松原神社がヤワタンマチに出祭するにあたって、汐入川が大

きく湾入して不便なため、新宿のお船で渡御したという。この故事にちなみ今もなお、安房・洲宮二社の神輿が新宿に立ち寄るのだという。」と報告している。いずれも安房・洲宮・下立松原神社が船で渡御して鶴谷八幡宮へ入祭したという神話的過去の再現として、新宿神明社の奉幣式があるといえる。

奉幣式の翌日、新宿のお船「神明丸」は、舳先に南三社の三本立ての幣束を奉って、鶴谷八幡宮まで巡幸する。松崎憲三の報告によれば、一四時五二分に鶴谷八幡宮へ到着して、安房神社へ拝礼↓八幡宮本殿への参拝↓安房神社以外の九社の神輿へ挨拶した後、所定の位置に付き、山車が境内に集まり、一六時一七分にお船は鶴谷八幡宮から出発するという。ここで大変興味深いのは、この同じ時刻に八幡宮宮司宅客殿では、三社祭（大屋の御神酒）が行われていることである。しかも、筆者の調査では、一六時一六分頃、三社祭が終わるが、松崎の報告によると、正に同時刻の一六時一七分に、南三社の幣束を奉ったお船は鶴谷八幡宮から出発することになる。そして、お船が出た後、一七時から安房神社を先頭に還御が始まる。

このように、入祭においては、新宿奉幣式が終わると、「神明丸」は新宿神明社から出御し、還御においては、三社祭が終わると、鶴谷八幡宮から「神明丸」は還御するといえる。言い換えれば、安房・洲宮・下立松原神社の三社は、お船「神明丸」を媒介として、「やわたんまち」においても相互に連関しているといえる。

## 七、おわりに

これまで洲宮神社に関わる複数の祭祀・祭礼を祭のドラマの視点から見てきたが、分析結果をまとめると以下の三つの特徴が明らかになった。

第一に、いずれの祭においても、あたかも『洲宮神社縁起』の筋書きに沿うかのように、神狩神事↓御田植神事↓例祭（お浜入り）↓「やわたんまち」



の順に、安房国開拓という神話的過去の再現としてのドラマを祭の中で演じてきたといえる。特に、例祭における明神山への「お浜入り」は、「白波のきよするうまし小浜」に鎮座したという洲宮神社の創祀・創建に関わる神話的過去の再現であり、森谷ひろみが指摘するように、正に『延喜式』神名帳の「后神天比理乃咩命神社」の註にある「洲神」の再現であった。そして、明神山↓魚尾山↓現・鎮座地と洲宮神社の「歴史」を神輿が巡幸をしながら辿ると同時に、洲宮集落の田畑に命の水をもたらす洲宮川の上流の水源近くと下流の浜辺近くを神輿が巡幸するため、「海と山との交歓」といった「風土祭祀」の要素も見られた。

第二に、いずれの祭においても、同一地域の安房・洲宮・下立松原神社の三社、いわゆる「南三社」が密接に連関しながら、祭のドラマを演じていることが判明した。神狩神事においては、神事に先立って、かつては、安房神社から下立松原神社へ弓と的場が渡され、その翌日、鹿倉山に祀った安房・洲宮・下立松原神社の石祠に奉幣を行い、また狩の真似ごとを行った。御田植神事においては、かつて元旦に下立松原神社の社人が安房神社で「御田植事」を行い、同じ元旦に洲宮神社で行う御田植神事の牛が逃げると安房神社まで行ってしまおうという伝承から安房神社と洲宮神社が繋がり、さらに正月三日には、安房神社で行った「御田植事」を、今度は下立松原神社で行った。例祭においては、かつては洲宮神社の神輿が安房神社の例祭へ神幸して安房神社へ一泊した後、洲宮神社に還御して洲宮神社の例祭を行い、明神山へ「お浜入り」した。下立松原神社の神輿も安房神社の例祭に神幸し、洲宮神社と同じ御飯屋で一泊した。「やわたんまち」においては、現在は安房神社と洲宮神社で新宿神明社へ奉幣式（ヒイレ）を行っているが、そこで安房神社宮司が奉る幣束の一つに三本立ての幣束があり、これが安房・洲宮・下立松原神社を表す。奉幣式の翌日、新宿のお船「神明丸」は舳先にこの三本立ての幣束を奉って、鶴谷八幡宮まで巡幸する。そして、一六時から、鶴谷八幡宮・宮司宅客殿で安房・洲宮・下立松原神社の三社が八幡宮宮司から御神酒を頂

く「三社祭」(大屋の御神酒)を行うが、ちょうどそれが終わると、三本立ての御幣を奉った「神明丸」が鶴谷八幡宮から還御する。

第三に、洲宮神社は安房神社の「后神」を祭の中で演じていることである。特に、「やわたんまち」では、安房・洲宮神社の担ぎ手の双方に「夫婦神」であることが共有されている。また、御田植神事でも、かつては同じ元旦に安房・洲宮神社の夫婦神が揃って「御田植事」を行っていた。さらに、例祭の「お浜入り」は、祭のドラマから見ると、『延喜式』神名帳の「后神天比理乃咩命神社」の註「元名「洲神」」に相応しく、夫神である式内社「安房坐神社」(安房神社)の「后神」を体現しているといえる。こうした観点からみると、「后神天比理乃咩命神社」の候補である洲崎神社より洲宮神社の方が式内社に相応しいといえる。しかも、安房神社と洲宮神社は、安房国開拓神話の再現を基層としながら、神狩神事・御田植神事・例祭・「やわたんまち」において相互に連関しているが、洲崎神社では、神狩神事・御田植神事を行わず、安房神社への神幸祭も、「やわたんまち」への入祭も行われない<sup>(47)</sup>。このことは式内社の比定においても重要な問題を孕んでいる。

このように、洲宮神社の祭祀・祭礼は、かつては安房国開拓の神話的過去を再現するために、開拓の由緒を持つ安房・下立松原神社と四季の祭で連関しながら、特に、安房神社の「后神」としての役を祭の中で演じ、安房国全体の再生と稲作の豊穡を約束することにその意味があったといえる。つまり、祭のドラマの視点から同一神社・同一地域の複数の祭祀・祭礼を対象として、洲宮神社の宗教的世界観が浮き彫りにできたといえ、神道という宗教文化の一端を示せたといえる。

しかしながら、柳川啓一は、藪田稔の祭の定義<sup>(48)</sup>を引きながら、非ドラマ的要素にも注目する必要性を説いているように<sup>(49)</sup>、ドラマとしての祭の要素しか見えてこないという限界もある。こうした限界を超える意味で、柳川は「まつりの感覚<sup>(50)</sup>」の問題も提示している。他方、洲宮神社の祭祀・祭礼は、子ども神輿の導入や児童養護施設「ひかりの子学園」の祭への参与など、現代社

会の変化にも対応している。石井研士が指摘する社会変動と神社神道の問題もある。こうした課題を総合的に検討した結果、柳川が提示した三つの神学に追加し得る四つ目の「神学」を提示することができるであろうか。今後の大きな課題といえる。

## 註

(1) 藪田稔は、神道という宗教について「神道の本流たる神社神道は、かくいう日本文化に内在した宗教性に古来終始一貫して根ざしてきた、いわば自然成立の宗教であって、古代の都市文明にあつて土着の農耕文化を批判的に離脱した「精神革命」の所産たる教団宗教、すなわち達人的教祖が創唱した教義教説を奉じる排他的な篤信集団という性格をもちあわせていない。したがって、その特性といえ、日本という森林列島を豊かな歴史風土たらしめた民族社会が地縁や血縁による共同体の宗教を営むなかで、日本化した仏教と共棲しながらも、風土と家郷の生命の靈性を神霊として祀る神話と儀礼の宗教文化にほかならない。」(藪田稔「文化としての神道」弘文堂、平成一七年、二七頁)としている。筆者も基本的にこの立場に立つて分析を進めたい。

(2) 柳川啓一「祭の神学と祭の科学—会津田島祇園祭—」『祭と儀礼の宗教学』筑摩書房、昭和六二年、九五—一二二頁。

(3) ここで柳川がいう「神学」とは、「実験・観察・証明の不可能な要素に究極的な原因を見出す学問」で、「科学」とは、「直接に観察できる諸事実の間に存在する関係を研究する学問」と位置づけている。

(4) 柳川は「宗教現象の客観的・科学的理解を目指してきた宗教学には相容れない語感をふくむ神学という言葉を使ってみて、祭の科学的研究は、まれに意識的、多くは無意識的に何かの神学を根拠としていること、したがって研究の進展をはかるためには、神学を完全に排除した徹底的な科学的研究というものを目指すのではなく、どこまでが科学であり、どこからは神学であるかという区分を常に意識し、自覚する必要があること、諸神学学説があれば、それにもとづく科学的分析もまた諸方向にあるだろうと予想している。」(柳川前掲書、九六頁)と指摘している。

(5) 藪田稔「祭りの現象学」弘文堂、平成二年、六四頁。

(6) 藪田稔「都市祭礼としての川越氷川祭」『文化としての神道』弘文堂、平成一七年、九六—九七頁。

(7) 茂木栄「まつり伝承論」大明堂、平成五年、など。

(8) 島田潔「中世諏訪上社の大祝と職位式—即位儀礼の構成と意味—」『國學院大學日本文化研究所紀要』第77輯、國學院大學日本文化研究所、平成八年、一—三六頁。同「相模国国府祭の持続と変化に関する予備的考察」『國學院大學日本文化研究所紀要』第80輯、國學院大學日本文化研究所、平成九年、五九—一〇二頁、など。

(9) 例えば、松平誠は「都市祝祭の社会学」(有斐閣、平成二年)の序論の中で、柳川の「祭の神学と祭の科学」を踏まえた上で、「本書では、こういった「実験・観察・証明の不可能な要素に究極的原因を見出す学問」の方向には踏みいることを避けている。本書は、基本的に実証科学のうえにたつたものである。」(二八頁)として、柳川が意図した問題に踏み込んでいない。

(10) 秋野淳一「里芋祭の儀礼構成にみる再生のドラマ—千葉県館山市茂名十二所神社の祭礼—」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第2号、國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター、平成二二年、一〇九—一一九頁。

(11) 島田潔「神道宗教」を中心とした戦後の祭祀学・祭り研究『神道宗教』一六九号、神道宗教学会、平成九年、五三頁。

(12) 島田潔「中世諏訪祭祀における王と王子」『祭礼と芸能の文化史』藪田稔・福原敏男編、思文閣出版、平成一五年、四七—七六頁。

(13) 茂木栄「十五童・玉・花・翁—奥三河古戸のシカウチ神事・白山祭・花祭・田楽—」『アジアの宗教と精神文化』脇本平也・田丸徳善編、新曜社、平成九年、四九頁。

(14) 藪田稔は、前掲書「祭りの現象学」で、「古代から中世にかけてのいわゆる「歴史時代」に入つて、歴史事象そのものが真実の表象とみなされてくると、祭りは神話世界の再現、つまりは宇宙の再創造という意識は薄れ、代わつて神話化された過去の復活がその中心となる。」(五六頁)としている。また、藪田は「祭とマチ文化」の中で、マツリとイベントを対比し、「マツリが本来的に神話的過去の再現をめざすのにたいして、イベントはつねに陳腐さを嫌い、現状の変化を求めるところに本質的な違いがある。」(井上忠司編『都市のフォークロア』ドメス出版、昭和六三年、一一〇頁)として、「神話的過去の再現」がマツリであると位置付けている。そこで、本論では「歴史時代」の変化、現代のイベントとマツリの対比も踏まえ、「神話的過去」という用語を採用したい。

(15) 千葉県館山市洲崎にある洲崎神社と洲宮神社が論社である。森谷ひろみ「第五報 后神天比理乃咩命神社について」『安房国式内社に関する歴史地理学的研究』(森谷恵、昭和五二年、六一—一二七頁)に詳しい。

(16) 前掲森谷「第五報 后神天比理乃咩命神社について」の中で全文を起こしている(七九—八〇頁)が、本論では、海老名雄二「典籍・絵画その他」『安房神社並びに安房神社周辺特定地区文化財総合調査概報』(千葉県教育委員会、昭和四三年)に全文掲載された読み下し文をテキストに使いたい。

- (17) 洲宮・洲宮神社の概観は、竹内理三編『角川日本地名大辞典』12千葉県(角川書店、昭和五九年、一〇五六頁)、館山市役所「町丁字別(行政区別)人口」(館山市役所、<http://www2.city.tateyama.chiba.jp/>平成二三年一月八日閲覧)、『房総の杜』千葉県神社庁房総の杜編纂委員会、平成一六年、二五五頁)、千葉県神社名鑑刊行委員会編『千葉県神社名鑑』(千葉県神社庁、昭和六二年、八〇二頁)、『洲宮神社略記』(神社配布のパンフレット)を参考とした。
- (18) 『延喜式』神名帳では「天比理乃咩命」の表記であるが、『続日本後紀』などでは「天比理乃咩命」の表記になっている。本論では、引用文以外は「天比理乃咩命」で統一したい。
- (19) 社伝には、「神武天皇元年辛酉四月中、卯ノ日、天富命社ヲ村ノ南方字魚尾山ノ上ニ建テ、后神天比理乃咩命ヲ祭ル、山ハ海邊ニ在リ、故ニ洲ノ神、或ハ洲ノ宮ト稱ス、山ノ名、洲ノ宮ノ字アリ、後ノ海ノ漸ク干瀉トナリ、海ヲ距ル七町餘ニ至ル、文永十年癸酉、火災ニ罹リ、今ノ地ニ移スト、佐伯有義編『神祇全書』第四輯、皇典講究所、明治四二年、五〇六頁」記されている。また、柳岡良弼『安房國神社志料』所載の「齋部宿禰本系帳」(洲宮祠官小野氏所傳)には、「諸幾」の箇所に、「正和三年冬十月二日死 文永十年、神宣ニ依テ社頭ヲ明鏡山豊榮地□ニ遷シ建、此由鎌倉ニ奏上ス、當國郡司安西彌七郎奉行トシテ、免尾山ノ嶺ニ鎮座シ奉ル、黍田ヶ浦海上、大島ヨリ遠江灘ヲ遠見ス、弘安四年蒙古退治ノ爲メ、官幣ヲ奉ラレ、神階勳二等ヲ授ラル、(前掲佐伯『神祇全書』、五一〇頁)とある。
- (20) 柳田國男『日本の祭』(柳田國男全集)一三、ちくま文庫、平成二年、三〇四―三〇五頁。
- (21) 大島建彦「ミカリ追記」『西郊民俗』第十九号、西郊民俗談話会、昭和三六年、一二―一四頁。大島によれば、洲宮の箇所は、聞き書きを行った大森士郎氏からの葉書の引用であるという。詳細は以下の通りである。「州の宮、三十五戸ぐらい。ミカリは旧十一月二十六日夜から九日間(今は月遅れ)。二十七日をイチノヒとして、元日と同じように休む。イチノヒのイミは元日よりもきびしかつた。一戸一升ぐらい持ちよつて、塩のないカユをたく。ササゲを入れる。氏子に出す。ミカリ期間中、ワラをいじらない。特にイチノヒは針仕事をしない。神社の巡幸なし。大火をたくことは昔はあつたが、火事を出して社殿の位置を移したといつて、言ひ伝えだけある。話者渡辺栄造(区長)、赤尾弥太郎(公民館長)の二人。」(一四頁)。
- (22) 青田美砂「房総の物忌み習俗」『西郊民俗』第百七号、西郊民俗談話会、昭和五九年、六頁。
- (23) 杉江敬「洲宮神社のオミカリ祭」『房総のミカリ祭り』(房総のミカリ祭り)映像記録作成委員会編、千葉県伝統文化伝承事業、平成一九年、五頁。
- (24) 大島・青田の研究では「イチノヒ」、杉江の研究では「イチノビ」となっている。ここでは筆者の調査時に聞かれた「イチノビ」の用語を使用することとする。
- (25) 平成二〇年は雨天のため、一四時から時間を早めて執行された。また参列者は平成二一年が氏子総代三名、平成二一年が氏子総代二名のみである。
- (26) 神狩祭の社殿での祭典は以下の式次第で行われた。①太鼓を叩き、祭りの開始を告げる。②修祓。③斎主一拜。④献饌。⑤祝詞奏上。⑥玉串奉奠。⑦撤饌。⑧斎主一拜。⑨太鼓を叩き、祭りの終了を告げる。なお、平成二〇年は社殿での祭典に御幣を奉り、祭典終了後に、西に向つて御幣を立ててから神事を行ったが、平成二一年は、社殿での祭典の前から御幣が西に向つて立てられていた。
- (27) 前掲海老名「典籍・絵画その他」一八頁。
- (28) 前掲海老名「典籍・絵画その他」一九頁。読み下しは板橋敏行氏の教示によると註がある。
- (29) 話者 M・K氏(昭和二三年生・洲宮在住)。
- (30) 神道大系編纂会編『神道大系』神社編十八、安房・上総・下総・常陸国、神道大系編纂会、平成二年、二六頁。
- (31) 齊藤夏之助『安房志』中島書店、昭和四七年、一九八頁。
- (32) 小林裕美「下立松原神社のミカリ祭り」『房総のミカリ祭り』(房総のミカリ祭り)映像記録作成委員会編、千葉県伝統文化伝承事業、平成一九年、九頁。
- (33) 大島建彦「下立松原神社のミカリ」千葉県安房郡白浜町滝口―『西郊民俗』西郊民俗談話会、平成五年、一二頁。この論文の中で、文化一二年に下立松原神社の神主・高山上総介によつて作られた「由緒書」が紹介されている。神狩神事の箇所のみ以下に引用しておきたい。「且又、神狐神事とて毎年十一月廿六日より、拙者并二下社家一統、十日之間当社齋場所ニ詰居、拙者社家共召連、字鹿倉と申獵場江登山仕、天下泰平五穀成就之祝詞捧下山仕候。尤、拙者より四代已前主計代迄ハ、近在より勢子出候二付、往古より仕来之通り、拙者家は弓矢携参り、狐之真似仕候由申伝候。唯今、勢子茂出不申候二付、右御祈禱已而二而帰社仕候」(八頁、傍点引用者)。
- (34) 齋藤前掲書『安房志』には、「十一月廿七廿八廿九。三日の間。獵場山鹿倉山の祭あり。南三社祭神天太玉命。天比理乃咩命。天日鷲命に奉幣。」(二〇五頁)とあり、安房神社・洲宮神社・下立松原神社を「南三社」と呼んでいる。
- (35) 藪田稔は、前掲『祭りの現象学』の中で、「季節祭では、季節や生産のリズムに沿つた自然的現実がそのまま祭りの象徴性を帯びるのに対して、記念祭は、歴史的事件などの社会的事実がその表象力の中心を占める。」(五七―五八頁)としている。
- (36) 前掲青田「房総の物忌み習俗」八頁。
- (37) 前掲海老名「典籍・絵画その他」一九頁。
- (38) 山路興造「おたうえまつり」『日本民俗大辞典』上、福田アジオほか編、吉川弘文館、平成二一年、二六三頁。

(39) 館山市史編纂委員会編『館山市史』国書刊行会、昭和五六年、九二七～九二八頁。  
館山市無形文化財（昭和四四年二月二日指定）として紹介されている。

(40) 千葉県神社庁特殊神事編纂委員会編『房総の祭事』千葉県神社庁、昭和五九年、六五～六六頁。

(41) 中嶋清一「神田植祭」『房総の祭り』うらべ書房、昭和六三年、二二～二三頁。

(42) 小川直之「筒粥と御田植祭」『千葉県の歴史』別編 民俗Ⅰ（総論）、千葉県史料研究財団編、千葉県、平成十一年、三二四～三三二頁。

(43) 前掲中嶋「神田植祭」二三頁。

(44) 前掲小川「筒粥と御田植祭」三三〇頁。ここで小川が「安房神社の御田植祭」とは、実際に田植を行う草苗振神事を指している。「安房神社にも草苗振神事とは別に、元旦から三日まで神田祭があるが、これも神職による祝詞奏上、玉串の拝礼、巫女舞だけの祭りである。」（三三二頁）としている。

(45) 森谷ひろみ「第七報 安房国式内社六座のまとめ」『安房国式内社に関する歴史地理学的研究』森谷恵、昭和五二年、八八頁。また、森谷は同書所収の「第五報 后神天比理乃咩命神社について」の中で、「この洲宮神社が、もと官幣大社安房神社の後神、天比理乃咩命神社であることを示す両社の関係は、「齋部宿禰本系帳」にある関係記事からもうかがうことが出来るが、現在なお元旦に行われている洲宮神社の「御田植神事」などの中にも、かなり強く出ているように思われる。」（二三三頁）と指摘している。

(46) 社殿での祭典の次第は、以下の通りである。①太鼓を打ち祭事の開始を告げる。②修祓。③齋主一拝。④献饌。⑤祝詞奏上。⑥玉串奉奠。⑦撤饌・齋主一拝。⑧太鼓を打ち祭事の終りを告げる。

(47) 神前には、本殿に向って、左から、水・塩、米、御神酒、牛役が被る布（職のようなもの）、初、苗（松葉）、耳餅二枚、その手前に、鏡餅、みかん、竹製の欵が奉られていた。

(48) 話者 S・K氏（昭和三年生・洲宮在住）。

(49) 前掲『神道大系』神社編十八、二五頁。

(50) 前掲小川「筒粥と御田植祭」三三〇頁。

(51) 高山義陳「村社 下立松原神社」『房総に於ける特殊神事』千葉縣神職會、昭和七年、一七〇～一七二頁。

(52) ここでは、子ども神輿と区別するため、「神社神輿」という表記を使用する。子ども神輿は、平成十一年七月一二日に、神社神輿のお色直し（塗り直し）の際と一緒に、洲宮で株式会社「ヤマト佛商」を営むM・H氏の寄付によって作られた。現在、児童養護施設・ひかりの子学園の中学生以下の子どもたちが中心となって担いでいる。

(53) 前掲森谷「第五報 后神天比理乃咩命神社について」。

(54) 笹生衛は、洲宮神社に伝わる祭祀遺物について、現在、館山市博物館に所蔵された実物資料の確認から「土師器杯の型式から7世紀代の祭祀遺物と考えられる。」（祭祀遺跡の分布と変遷から見た東国神郡の歴史的背景―安房国安房郡の事例を中心に―『國學院雑誌』第一一巻三号、國學院大學、平成二十二年、八頁）として、その註には「土師器杯は丸底で、古墳時代後期7期～8期と考えられる。筆者の資料確認による。」（前掲一五頁、註の（12））と分析している。

(55) 『新訂増補 國史大系』普及版Ⅴ「交替式・弘仁式・延喜式」前篇、吉川弘文館、平成七年、二三八頁。

(56) 前掲森谷「第五報 后神天比理乃咩命神社について」一〇一頁。隣接する藤原の神楽の動きについて、「洲宮神社宮司小沢恭司氏によれば、「例祭当日八月十日の後三時頃、まず藤原神社の神楽（獅子舞）が山の道を通って洲宮をぬけて谷藤原までゆき、次に洲宮神社に来て楽を奏する。その後、神楽が先に立ち洲宮神社の御神輿と一緒に御旅所「明神山」へと行く。そして夕方七時頃から明神山で祭典を行ない、又藤原の神楽を先頭に御神輿共々藤原へ。神楽は町内をまわり、藤原寺および役付の家々で神楽をまわす。一方洲宮の御神輿は、藤原から洲宮神社の前を通って谷藤原にゆき神社へと帰ってくるのが順である。」という。」と報告している。

(57) 例祭の祭典は以下の次第である。①祓所での修祓（神社神輿↓子ども神輿↓祭員（総代役員一名と楽人四名）↓参列者の順）。②太鼓（開始を告げる）。③齋主一拝。④御扉開扉（奏楽）。⑤祭員による手渡しの献饌（奏楽）。⑥祝詞奏上。⑦玉串奉奠。⑧祭員による手渡しの撤饌（奏楽）。⑨御霊遷し（奏楽）。⑩御扉開扉（奏楽）。⑪齋主一拝。⑫直会（洲宮青年館）。直会を除く祭事は、九時一三分頃～九時五四分頃の約四〇分程度の時間で行われた。神饌は、塩・水、白米、初米、海苔、鏡餅、りんご、大根・人参、御神酒、鰻（本来は鯛）の九台で、大太鼓一名・小太鼓一名・笛二名の奏楽に合わせて本殿へ供えられる。

(58) 一三時を過ぎると、神輿の担ぎ手に「洲宮神社」の名前が入った鉢巻が配られる。一三時一五分頃、拜殿前で、神輿団長の挨拶、総代会長の挨拶、神輿の助人の挨拶（平成二十二年は、安房神社の担ぎ手が二名、藤原から三名の計五名）、神輿のコーラス説明（休憩場所、時間など昨年と変化がないこと）、「還御は一九時の予定であること」、「子ども神輿はヤマト佛商会長宅より還御すること」などが伝えられる。御神酒（一升瓶を開け、茶碗に注いで担ぎ手に配る）の順で行い、出御となる。

(59) 時刻は、洲宮区配布資料「洲宮神社祭祀神輿渡御略図 平成二十一年八月九日（日）」を参考。

(60) 軒数・金額などによって、会計役が「一本」とか「二本」と神社神輿に合図し、家の前などで神輿を「一本」の場合は一回、「二本」の場合は二回の「サシ」を

行う。子ども神輿は一度につき三回、「サシ」をする。本来は神社神輿も一度につき三回の「サシ」がなされていたという。

(61) 平成一三年八月に神輿の担ぎ手の減少などから、洲宮の大王・Y・K氏によって神社神輿と子ども神輿の台車が制作された。

(62) ひかりの子学園では、子ども神輿、神社神輿が学園の中庭まで担ぎこまれ、そこでひとしきり神社神輿を左右に揺さぶって採んだ後、休憩となる。着物を着た学園の女の子が神輿の担ぎ手に料理等を配って廻る。ひかりの子学園は、昭和五五年六月一日に千葉県より施設認可を受けて、児童養護施設として開園した。その年の八月九日の例祭には神輿が学園の中庭まで渡御している（『ひかりの子学園30周年記念誌』ひかりの子学園、平成二二年、一〇頁）。

(63) 現在でも、年に一回、洲宮では魚尾山への参道の草刈りを行っている。魚尾山の頂上には石宮を祀っていたが、平成一四年にその石宮が古くなり、新しい石宮を作って魚尾山に祀った。その後、様々な事情から古い石宮と新しい石宮を魚尾山から降ろし、現在は洲宮神社本殿の脇に祀っている。ここからは、洲宮の人たちが魚尾山を洲宮神社の旧社地として大切に祀る心意が窺われる。

(64) ヤマト佛商会長宅では、平成二二年は、会長のM・H氏が自ら神輿を出迎えたため、「サシ」や「モミ」をして、それに応えていた。休憩ではM・H氏が用意した料理や酒類、飲料水が配られる。

(65) 神道研究会編集委員編『民間信仰——安房神社周辺地域——』第一号、國學院大學神道研究会、昭和四七年、一六〜二四頁。

(66) 話者 S・K氏（昭和三年生・洲宮在住）。

(67) 洲宮の方々の話による。また、山本志乃は「旧神戸村に属する各区では、昭和29年に館山市に合併した際に、それまで各区ごとにはばらばらだった氏神の祭礼日を、安房神社の例大祭である8月10日に統一しました。」（『茂名の里芋祭り映像記録作成委員会編』DVD「茂名の歳時記〜里芋祭り〜」解説書）千葉県伝統文化伝承事業実行委員会、平成一八年、四頁）と触れている。

(68) 変化した時期は、聞き書きを総合すると、昭和六一年頃、一九八〇年代半ば頃と推定される。

(69) 前掲海老名「典籍・絵画その他」一九頁。「相浜」の話の後、最後に、下立松原神社の創祀・創建の神話が続き、『洲宮神社縁起』は終わる。

(70) 前掲森谷「第五報 后神天比理乃咩命神社について」一〇四頁。

(71) 話者 T・I氏（大正一〇年生・洲宮在住）。I家の屋号は白帖である。

(72) 話者 T・I氏（大正一〇年生・洲宮在住）。

(73) 蘭田前掲書『祭りの現象学』、二四三〜三二五頁に詳しい。なお、蘭田稔は、「風土祭祀」の用語について、「鎮守の森と家郷社会の日本の集落秩序を考える」『社叢学研究』創刊号、社叢学会、平成一五年）の中で、奈良県の大和盆地全域の古

典型的な神社祭祀を踏査した際、「古代律令の神祇官祭祀に対応する古社群として、盆地を取り囲む奥山に祀る（水分神）と、周辺山麓に配置された（山口神）および盆地内に営まれた朝廷直轄の荘園ごとに（御県神）とが、大和盆地全体の地勢と水系に応じて有機的に配置され、全社が盆地の治水と灌漑を制する、いわば「風土祭祀」を構成していた」（四〇頁）と位置付けている。

(74) 柳川啓一は、前掲「祭の神学と祭の科学——会津田島祇園祭——」の中で、会津田島祇園祭の神輿の巡幸を「宿場町として栄え、漆が重要な商品であった過去のこの町の栄光が、神輿行列によってたどられていた。（中略）今もなお、神の「放浪」のドラマとしてとらえることができる。」（一四頁）と位置づけている。

(75) 蘭田稔は、「祭祀文化における伝統と現代」（前掲「文化としての神道」）の中で、静岡県磐田市の遠州見付天神祭を取り上げ、「たとえば見付天神祭で指摘しておいた「山と海との交歓」であり、天竜川と町内を貫流する今ノ浦川とを介した信州から遠州にいたる山々の霊性と遠州灘の海の霊性という、かつての見付宿を包む歴史風土の霊的な祭礼への参入にはかならない。」（九二頁）としている。また、茂木栄は、前掲書「まつり伝承論」の中で「蘭田稔氏のアドバイスによるところが大きい」（一三頁）としながら、「見付天神祭は、いわばヤマとウミの霊威の交わりということが出来る。普段は東海道の宿場として、東西に伸びる街道を生活の場としてきた見付の町は、実は南北につながる聖なる自然軸、つまり山・海の軸の出現によって生命力蘇生の神話的世界を作り出すことができたのである。進めていけば、空間的側面から、この祭は、普段はみえない海と山を結ぶハレ軸と、日常生活の営まれるケ軸とが交差する構造になっており、そこは、ヤマとウミの象徴が混在する場となる。祭の時に出現するこうした場において、山海の産物を交易する市が開かれ、人と物の交流がはかられたのであった。」（一六頁）としている。なお、この研究の初出は、蘭田稔・茂木栄・宇野正人・島田潔「見付天神裸まつり——海と山との交歓——」（國學院大學日本文化研究所、平成三年）である。本論はこれらの先行研究の視点に依っている。

(76) 本論では、「安房国司祭」ではなく、洲宮の人たちが一般的に使う「やわたんまち」という呼称を使用することとする。

(77) 前掲「館山市史」七二六〜七三八頁。

(78) 中嶋清一「やわたんまち」『房総の祭り』うらべ書房、昭和六三年、三一八〜三三三頁。

(79) 松崎憲三「安房のヤワタンマチ」『千葉県の歴史』別編 民俗Ⅰ（総論）、千葉県史料研究財団編、千葉県、平成一一年、五四七〜五六五頁。

(80) 田村勇「ヤアタンマチ」『房総の祭り』と共編——南房総のフィールドから——大河書房、平成一六年、六一〜七八頁。

(81) 前掲松崎「安房のヤワタンマチ」五六五頁。

- (82) 洲宮区配布資料「安房国司祭(やわたんまち)洲宮神社渡御略図 平成22年9月」を参考。
- (83) 前掲『館山市史』七三三頁、前掲松崎「安房のヤワタンマチ」五六二頁、前掲田村「ヤアタンマチ」六八頁。いずれも「ヒイレ」という呼称で紹介している。
- (84) 前掲松崎「安房のヤワタンマチ」、五六二頁。
- (85) 前掲『館山市史』七三三頁。
- (86) 話者 S・K氏(昭和三年生・洲宮在住)。
- (87) 六所祭は、①開始の挨拶、②修祓、③祭主一拝、④献饌、⑤祝詞奏上、⑥玉串奉奠、⑦撤饌、⑧祭主一拝、⑨終了の挨拶の順で行われた。
- (88) 鶴谷八幡宮と入祭一〇社を合わせて一一社。
- (89) 洲宮神社の宿は、本来Y家であったが、平成二一年はブツ(不幸)があったため、道を挟んだ向かいのK家が宿となった。
- (90) 洲宮神社の一行は、宿に一旦戻った後、神輿がある御飯屋に向った。
- (91) 洲宮区配布資料「安房国司祭(やわたんまち)洲宮神社渡御略図 平成22年9月」を参考。
- (92) 話者 S・K氏(昭和三年生・洲宮在住)、Y・T氏(昭和六年生・洲宮在住)。
- (93) 前掲田村「ヤアタンマチ」六八頁。
- (94) 前掲松崎「安房のヤワタンマチ」五六二頁。
- (95) かつては新宿神明社から船で鶴谷八幡宮へ渡御したという話をされる新宿世話人もいた。
- (96) 前掲松崎「安房のヤワタンマチ」五六三頁。
- (97) 神社本庁教学研究所編『平成「祭」データ』(全国神社祭祀礼総合調査) 神社本庁、平成七年(CD-ROM)によれば、洲崎神社の年間の恒例祭祀は、一月一日・歳旦祭(通称 元旦祭)、一月七日・大漁祈願祭(通称 湯立て)、二月上午の日の初午祭、旧暦六月一五日の神輿祭、八月二二日の例大祭、十一月一五日の

七五三祭、一二月三〇日の大祓である。

(98) 前掲蘭田「祭りの現象学」六四頁。

(99) 柳川啓一「祭にひそむ二つの原理」『祭と儀礼の宗教学』筑摩書房、昭和六二年、九一頁。

(100) 柳川啓一「祭りの感覚」『現代日本人の宗教』法蔵館、平成三年、七七〜九八頁(原題「まつりの感覚」『宗教研究』第四九卷第三輯(二二六号) 日本宗教学会、昭和五一年、一一〜三〇頁)。

(101) 石井研士は『戦後の社会変動と神社神道』(大明堂、平成一〇年)の中で、戦後の社会変動と神道の研究史を概観し、「神社神道が持続もしくは変化しているのかどうか、あるいは、どのような点が維持され、どのような点に変化しているかを判断する具体的なデータはほとんど示されないままに、これらの重大な問題が論じられてきたといっている」(四九頁)と具体的データに基づく実証性の欠落を指摘した上で、「今一度、こうした個別領域での研究の壁を取り払って、実証性を伴った社会変動と神道の関係の全体像を把握する作業が必要であると考え」(五〇頁)と問題を提起している。

※掲載した写真は全て筆者の撮影による。

#### 【付記】

本論の作成に当り、現地調査では、洲宮神社宮司・藤森益樹氏、川口実氏、川口昭三氏・常夫氏、川口富房氏、友野裕一氏、飯田卓爾氏・千秋氏、佐野昇氏、佐野正志氏、長谷川満氏、西網覚雄氏をはじめとした多くの洲宮区の方々にお世話になりました。また、京都大学名誉教授・蘭田稔先生、國學院大學教授・茂木栄先生、國學院大學講師・島田潔先生には、貴重なご助言を賜りました。篤く御礼申し上げます。